
勘違いはよくある事

kiki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違いはよくある事

【Nコード】

N9914X

【作者名】

kiki

【あらすじ】

勘違いで巻き起こるシュールなラブストーリー

重複投稿です。

「友恵ともえ？」

休日、近くの繁華街で信号待ちをしている俺は見てしまった。彼女が男友達の浩太と買い物をしている所を。ガラス越しに彼女とあいつは仲良く談笑している。

友恵があのだと？ なぜ？

信号はとつくに青になつていた。はつとなつて歩き始めるも、すぐに引き返した。問い詰める勇氣は俺にはない。

足早に帰り道を歩く。胸が苦しい。そんなに歩いてもないのに、息をきらしていた。

昨年、高校に入学した時、同じ教室で友恵と初めて会った。すらっとした体型に透き通るような肌、肩まで伸びた髪は毎日手入れされていて、一本一本がさらさらしている。

そんな彼女に一目ぼれし、告白したのは学校近くの川が流れる橋の下だった。

友恵は目を丸くし驚きながらも、小さく頷いてくれた。俺は天にも昇るような気持ちだった。俺にも春が来たのか。そう思った。

しかし、その気持ちと今の気持ちは真逆。

まさか、浩太のやつ。俺が友恵と付き合っているのを知っているから、友恵に近づいたのか？

湧き上がる激しい嫉妬。明日、浩太に会って問い詰めてやるうか。家に戻っても高まった熱は抜けない。その日は夜も眠れなかった。

次の日、体調は最悪だった。寝不足で休もうかと思つたが、母は熱が出てふらふらなのはともかく学校を休むとか、そういう事を許さない。母を騙す方法を考える間もなく、俺は家を出た。足取りは重い。

「透！」

後から聞き慣れた声が聞こえてきた。俺は振り返らない。こんな疑心暗鬼の時に彼女に会いたくなかった。友恵は俺の横に来て、にこっと笑いかけてきた様だが、その顔を俺は見ないようにした。

「はあ。今日も寒いね」

「……」

手に白い吐息をかけている。俺は無言のまま、歩いているといきなり友恵に手を握られた。彼女の温もりが手を伝って感じる。

「わっ！ 何をするんだお前」

俺は咄嗟に振り払った。しゃいな俺は他のクラスの連中にそんな姿を見られたくなかった。友恵は一瞬むっとした表情になったが、すぐに元の笑顔になった。

「どうしたの？ 元気ないじゃん」

「別に」

上目使いで聞いてくる彼女に俺はそっぽを向いた。

今すぐにも昨日の事を問い詰めてやりたかった。でも、答えを聞くのが怖い。だからと言って、このままで良いとは思わない。

「昨日、あまり寝てないからかな」

俺は適当にそれらしい事を言った。事実それが原因なのだから。

「そっか。何時に寝たの？」

「四時くらい」

「えーっ！ 朝じゃん。それまで何してたの？」

「勉強」

「うっそだあ」

他愛もない会話だが、その間、昨日の事を忘れさせてくれる。

学校に着くと、友恵とはクラスが違うので別れた。教室に入ると浩太がもう来ていた。

「よお」

「ああ……」

浩太の顔を見ると、昨日の事が嫌でも思い浮かんできた。もやもやした気持ち。

浩太とは小学生からの親友だ。中学の時は同じ陸上部で、ともに汗を流した。気前の良い奴で、良い事と悪い事の区別は出来る全うな人間だ。

そんな親友を疑うなんてどうかしてる。そうさ。昨日はたまたま友恵に会っただけなんだ。そこを見かけただけじゃないか。

俺は気持ちの整理をつけようと、頭の中で必死に格闘していた。

昼になると、俺はかばんから弁当を取り出した。浩太は昼飯を買いに教室を出た。いつもなら、もうすぐ友恵が来る。三人で机を囲んで食べるのが日課だ。

しかし、友恵は浩太と一緒にやって来た。

あれ？ おかしいな。いつもは別々に来るのに？

俺は疑念を抱いた。

「よつと」

浩太は俺の机に買ってきた弁当を置く。続いて、友恵がナフキンに包まれた弁当を置いた。

友恵は弁当を忘れたわけでもないのに、買いに行った浩太と一緒に来るとはどういう事だ？ たまたまなのか？

「どうしたの？ 険しい顔して？」

「うんこか？ 我慢してるなら行って来い」

「ちよつと。浩太君。これから食べるって時に変な事言わないでよね」

あははと俺は苦笑いし、冷静を装う。

「そついや、土日どっか行った？」

俺はちよつと鎌をかけてみた。

「あ？ 別に。一日中家でゴロゴロしてたな」

「私は妹が風邪ひいてて、ずっと看病してたわ」

二人とも嘘をついている。なぜだ？ なぜ……。

嘘をつく理由が思い当たらない。

「どうしたの？ 透？ 全然食べてないけど……」

「本当だ。大丈夫か？」

「一口も食べてない俺に二人が心配そうに見つめる。」

「だ……大丈夫だ。ちよつと寝不足でな」

俺は誤魔化した。

放課後、俺は屋上に友恵を呼び出した。浩太との事をはっきりさせるためだ。冷たい風が吹き付ける中、ドアが開いた。

「わっ。さつむー」

友恵は肩をすくめながら、歩いてきた。スカートが揺れている。

「話って何？」

「昨日、浩太と一緒にいたよな？」

「え？ あ、うん。ばれちゃったか」

友恵は舌をベロツと出して、はにかんだ。

「何で嘘ついたんだ？」

「んー？ 内緒」

「内緒って、ふざけんよ！」

俺は大声を出した。友恵は目を見開き驚いている。

「と……透？」

「浩太の事好きなのか？」

「はあ？ 何でそうなるの？」

「嘘つくって事はそういう事だろーが！」

「信じてくれないんだ」

友恵は、反抗する子供のように俺を冷たく睨んだ。

「だから、隠さずに本当の事言えよ。それで済むだろ」

「もう、いい」

友恵は逃げるように屋上を去るのを俺は止めもせず、後から冷ややかに見送った。

なんだ？ 逆切れか？ 怒るのはこっちだろっ！ ふざけやがってっ！

俺は友恵を嫌いになりかけていた。

しばらくして屋上から出た。階段下りていく途中、浩太に会った。こいつ、まだ帰ってなかったのか。

「何かあったのか？ 友恵ちゃんの様子が変だったぞ」

「何でもない」

「待てよ。ちゃんと話せよ」

通り過ぎようとした俺を制止するように、浩太は後ろから肩を掴んだ。俺は振り向き様に肩を上げ、その手を振り払った。

「話せ？ そりゃ俺のセリフだろ？」

「は？ 何の事だ？」

「とぼけるなよ。昨日、友恵と仲良く買い物してたところ見たんだよ」

俺は吐き捨てるように言った。声が若干震えている。

「そうか。……あれはな」

俺は学校を飛び出し友恵を捜した。

昨日、友恵が浩太を誘ったのは事実だった。しかし、それは明日、俺の誕生日にあげるプレゼントを選ぶためだった。友恵は浩太が俺の昔からの親友だから、好みがわかるだろうという事で誘ったのだ。

勘違い。勘違いだった。

友恵はもう帰ったのか？

俺は息を切らしながら走りに走った。

夕日が沈みかけていく。もうあきらめようかと思っただまさにその時、橋の下にいる友恵を見つけた。俺が友恵に告白したあの場所だ。流れている川を見ながら物思いにふけっている。

「はあっはあっ……。と…友恵……」

「透！？」

友恵は驚いて立ち上がった。

「はあ……はあ……」「うっめん」

「……」

彼女は俯き、俺の方を見ようとしない。

「お…俺の勘違いだった。ほんと…ごめん」

俺はぎこちなく頭を下げた。これで友恵が許してくると思っ
た。

「いや。許さない」

友恵の表情は変わらない。

「どうしたら許してくれるんだ？」

「……」

「そっぴや、俺のプレゼントは？」

「捨てた」

「え？ どこに？」

友恵はぷいっと川の方を向き、しゃがみこんだ。

「まさか……」

「知らない」

川に捨てたのか？ くそっ！ こうなったら……。

俺はカバンを置き、上着を脱いだ。そして、川に飛び込んだ。水
しぶきが散らばる。

「きゃっ！ 何してるの？」

「どこに捨てたんだ？」

歩きたびバシャバシャと音が鳴る。足から感じる川はとても冷た
い。

「馬鹿な事しないで！ 風邪ひくよ！」

「捨てた場所を言えっ！」

そうすると、友恵はカバンを開け、袋を取り出して見せた。その
表情は怒っているのか、顔を赤くして睨んでいる。

「あれ？」

「捨てたなんて嘘よ」

俺はやられたと思い、岸へ上がった。

「つめた！」

びしょぬれになった靴を脱ぎ、岩に座った。そこへ友恵が来て、

さつき見せた袋を差し出した。

「ん」

「あ……ありがとう」

さつきそく中身を確認すると中にはウルトラマンのフィギュアが入っていた。

俺は固まった。

「あ……これって」

「何？」

「いや……。何でもない」

浩太は俺の好きな物を勘違いしているのだろう。
何もわかってなどいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9914x/>

勘違いはよくある事

2011年10月28日15時17分発行